フリガナ	ヨウ　フウ　コウ
氏名	楊　夫　高
学位	博士（文学）
学位記番号	新大院博（文）第３４号
学位授与の日付	平成２０年３月２４日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
博士論文名	平家物語の構想　―歴史叙述と前兆記事―
論文審査委員	主査　教授　鈴木孝庸
	副査　教授　舩城俊太郎
	副査　教授　荻　美津夫

博士論文の要旨

本論文は、四百字詰め原稿用紙に換算して、約五百四十枚である。

序論は全三章、本論は全五章、これに結論および参考文献一覧から成る。目次は以下の通りである。

「平家物語の構想―歴史叙述と前兆記事―」

- 序論　第一章　平家物語の研究史概観
- 　　第二章　主題と構想に関する研究史 ―本研究における問題の所在―
- 　　第三章　古代における天文異変の認識
- 本論　第一章　延慶本平家物語の〈彗星記事〉と歴史叙述
- 　　第二章　延慶本平家物語の天変記事と歴史叙述の構想
- 　　第三章　「帝王鑑戒としての天変記事」と「物語の展開を予兆する天変記事」
- 　　第四章　覚一本平家物語における「暗示の二重構造」
- 　　第五章　平家物語における二重暗示構造の構想
- 結論
- 参考文献一覧

序論は、平家物語研究の大きな流れを述べ、本論文のテーマに関わる研究史を述べ、本論に入るための前提的な考察を行っている。本論は、平家物語の種々の前兆記事を諸本にわたって比較考究し、歴史と物語のあり方にまで論究したものである。

以下、各章の要旨を記す。

○　序論 第一章　平家物語の研究史概観

江戸時代前期の『参考源平盛衰記』から始まり、明治期の歴史学の側からの否定的評価、評論界の叙事詩としての評価、山田孝雄の諸本研究の基礎固め、館山漸之進の平曲研究の基礎固め等を述べ、その後の研究の推移を概観している。『参考源平盛衰記』からは約三百年、近代的な研究としては約百年である。

大正期の研究史は、諸本研究・成立論関係のその後についてであり、昭和前期は、典拠・説話・作品論・諸本に関する研究を整理している。戦後は、歴史学的研究・叙事史論的研究から始まって、諸本研究の進展および主要伝本の刊行という研究条件の整備を述べている。さらに、古態論争を経て、延慶本重視の現況までを述べ、平曲研究についても言及している。

○　序論 第二章　主題と構想に関する研究史

いくつかの項目をたてて、「主題」と「構想」に関する研究史を整理している。主要な観点としては、1 「序章」を重視する仏教文学としての評価およびその賛否両論、2 時枝誠記論文を大きな転機とする原平家論、末法思想論、3 諸本研究の進展にともなって、覚一本中心の研究から他の伝本にも関心がひろがって、特に延慶本が重視されるようになったこと、4 古態論争にからんでの説話文学としての形成論を基礎とする研究、5 人物論と構想論の交流、などである。

最後に、「前兆記事」に関する研究情況を把握し、これまでの研究が、(ⅰ)物語としての観点でのみ、(ⅱ)単発的な呼応関係の指摘にとどまっていたと整理し、本研究が、

a　各伝本の独自性追求にふみこむこと

b　諸前兆記事の内部の連繋について究明すること

c　歴史叙述のあり方に関わる問題としてとらえようとすること、

などを主眼とすることを述べる。

○　序論 第三章　古代における天文異変の認識

本論の論点に関わる前提的な考察を行う一章である。

中国の古代において、天文は地上世界と呼応していると考えられていたこと。天文異変は、地上の、特に国家・皇帝の危殆に関わるさきぶれと考えられていたことを確認。さらに日本においても同様の考えであったことを確認している。

そして、日本の古典文学の中でも同じ天変観が反映されていることを具体的に検証し、特に平家物語に近い位置の軍記ものでも「帝王鑑戒」の意味をもつ現象として天変がとらえられていることを指摘している。

○　本論 第一章　延慶本平家物語の〈彗星記事〉と歴史叙述

延慶本の天変記事を概観した後、巻二の終わりと巻三の始めにほぼ同時期の出現として記される〈彗星〉記事のあり方に着目。物語としての微妙な表現の差違を問題にしながら、第一の彗星記述は、それ以前の物語(鹿谷事件) を収斂させるような位置にあるとともに、〈帝王〉怨霊の歴史を回顧することに重点が置かれる。第二の彗星記述は、この時点以降の物語展開(清盛のクーデター)

をさきぶれしながら、より近い時点の大事件として後白河院の灌頂をめぐる仏教界の大衝突事件に関わるものと解釈できる。いずれも、源平の争乱という物語的展開に関わる天変としての役割が与えられながら、古代の歴史叙述の根幹ともいうべき〈天皇・皇室〉関係の重大事に関わる天変としての役割も与えられていると論じている。

○　本論　第二章　延慶本平家物語の天変記事と歴史叙述の構想

延慶本巻六の〈太白昴星犯合〉記事は、清盛亡き後の平家一門のはかない栄華の記事中に記されている。平家物語諸本は揃って、この天変に『天文要録』の解釈を併記するが、延慶本はさらに、中国唐代に同じ天変があったと回顧し、玄宗皇帝・楊貴妃関係の話を詳述する。これは、日本の当代の平家の有様を批判すると同時に、この先の平家一門の運命を予兆するものであった。延慶本は、続いて日本の過去の同様の天変を二例を記し、〈帝王〉に関わる重大事であったという。これまた当代にとっては、安徳帝の運命に関わる天変と解釈できるのである。

右の〈太白昴星犯合〉記事群と離れた位置にある、別の天変記事二つも、安徳帝に関わる不吉な予兆と解釈されるのであり、〈太白昴星犯合〉記事群と呼応していると論じている。

○　本論　第三章　「帝王鑑戒としての天変記事」と「物語の展開を予兆する天変記事」

覚一本平家物語の天変記事は、厳選されたものか、二つである。しかし、その天変記事は、歴史叙述の構想の大きな変換点に位置している。

第一の彗星記事は、その前後で構想の変化が認められる。彗星記事以前の叙述は、末法の世の全体像を描写するが、彗星を境にして、末法の世の諸現象は、平家(清盛)の悪行によるものだと絞られてくる。さらに、第二の天変・太白昴星犯合記事を境にして、源平の抗争を描こうとする構図が明確になる。

覚一本の検討を、第一・二章の延慶本の検討結果と比較し、さらに他の伝本の天変記事のあり方とも照合すると、平家物語の天変記事の性格は、一方では、古代よりの天変観「帝王鑑戒」としての意味をもつものであり、他方では、新たに平家一門の運命に的を絞った、物語の展開に沿うような天変観が創造されている。

延慶本は、二つの性質をもつ天変記事を合わせ持っているが、覚一本では物語的な意味の方に重点が置かれていると論じている。

○　本論　第四章　覚一本平家物語における「暗示の二重構造」

視点を天変以外の前兆記事に転ずる。

覚一本の七つの前兆記事を取り上げ、このうちの六つが、それぞれその記事後の物語展開に直接かかわることを確認する。さらに、治承三年の「辻風」記事が、史実を改変したものであることを確認し、この「辻風」は新たな位置を与えられ、多様な要素を含む占文が付されていることは、他の五つの個別の前兆記事を二グループに分けて含み込むような形をとっていると指摘する。いわば、物語のしくみとして、二重に前兆が仕掛けられているのだと論じている。

○　本論 第五章　平家物語における二重暗示構造の構想

第四章で、覚一本の「辻風」記事が、小単位前兆記事を二グループにまとめながら包むような二重の複合的な暗示構造を形成していることを論証したが、これが、他の平家物語伝本では、どのような形になっているのかを検討している。

全十三の諸本について検討した結果、四つの形に分類できるとしている。第一は、覚一本的なもので、二重暗示構造が形成されている。第二・第三は、二つの対応関係のうち、それぞれ一方の対応関係が形成されない不完全なものである。第四は、二重暗示構造がまったく形成されないものである。

右の結果をふまえて、さらに「辻風」の占文の記述を中心に検討を深めた結果、辻風の史実の改変、位置の改変にともなって、物語として暗示を構想しているのかどうかがわかると論じ、特に、代表的な二伝本の形で言うならば、延慶本は〈帝王〉〈王法〉をより重視して記そうとする傾向があるのに対し、覚一本は、〈王法〉的な観点から〈平家滅亡〉の観点へと重点を移していく傾向があると論じている。すなわち、延慶本は、旧来の歴史叙述を基本とする傾向が強く、覚一本は、新たな物語的歴史叙述に踏み込んでいるのだということである。

○　結論

序論および本論で述べたことをあらためて確認したのち、本研究が、平家物語の諸本のうち対照的・代表的な二伝本の書き方を、前兆記事の考究を通して考察したものであることを述べ、「平家物語」という書名は同一ながら、〈国家・帝王〉に関わる古代の伝統的な歴史叙述を色濃く残す延慶本に対し、覚一本は、帝王関係から離れて平家一門の悪行・滅亡という観点による物語的歴史叙述を創造していく傾向にあるのだと結論する。

審査結果の要旨

本論文は、「軍記もの」の代表的な作品『平家物語』を主たる研究対象として、所謂「軍記もの」「歴史文学」の歴史把握・歴史叙述を論じたものである。

平家物語には、随所にふしぎな現象が配置され、そのあとに起きる大事件の先触れとして、巧妙に仕組まれている。楊夫高は、そのことに着目し、作品のテキストを丁寧に読み解き、同時代史料との比較検討も行い、史実と虚構の問題にも配慮しながら、平家物語が、平安時代末期の大動乱を、「歴史」として、どのように「構想」「叙述」したのか、またその「構想」「叙述」は、平家物語として統一的にとらえられることができるのか、というような問題を論究した。

本テーマに関わる先行研究は、研究史として整理されているが、特に天変記事については、従来は平家物語の注釈書でほんの少し触れられる程度に過ぎず、物語の在り方、あるいは歴史叙述の問題として論じられたことはほとんどなかった。また、天変以外の前兆記事についても、比較的近い射程内で解釈されるのが、これまでの捉え方であったが、楊は、あらたな検討を行って、複合的な構造をもっていることを明らかにしたのである。

本論文において評価すべき研究の姿勢・方法は、次の通りである。

・対象作品のテキストの読み込みの上で課題を設定していること。
・特に、注釈書のない延慶本平家物語を読み込んだことも、高く評価できる。
・平家物語の主要な諸本に関する目配りを怠らなかったこと。
・平家物語の扱った時代と同時代の史料を検討していること。
・中国日本の、古代の歴史書を確実に検討していること。

これらは、日本の古典文学研究において欠かすことのできない手続きというべきであり、楊は、これらの方法を着実に自分のものとしたのである。

さらに、本論文において、新たに学界に示された見解は、次の通りである。

・延慶本平家物語の巻二から巻三にかけての叙述が、天変記事を中心にして、有機的に構成されていると分析したこと。
・延慶本平家物語において、平家ゆかりの帝王・安徳天皇を重視する視点があることを指摘し、点在する天変記事が、この点に集約されると論証したこと。
・延慶本平家物語は、帝王にかかわる古代の伝統的な天変観を、歴史叙述の基本にもっていることを検証したこと。
・覚一本平家物語において、天変記事が、物語の初期構想を変化させる働きをもっていると論証したこと。
・覚一本平家物語において、史実を改変して仕組まれた前兆記事が、物語全体の構想を覆う形となり、その結果、複合的な暗示構造が形成されていることを検証したこと。
・平家物語の主要諸本を見渡すと、覚一本のような達成度に至っていない段階の伝本も、様々な形で残されていることを確認したこと。
・平家物語が、古代的な歴史叙述の伝統(帝王中心の)を受け継ぎながら、新しい叙述方針(新時代＝末法の到来。臣下に焦点を当てる)を模索し、創造したことを論証したこと。

これらの成果は、平家物語研究にとって斬新な成果というべきものであり、本論文中においてはあえて踏み込んで主張されてはいないが、近年論じられることの多い「歴史」と「物語」の問題が、平家物語を題材として具体的に論証されたものと大いに評価することができる。

楊夫高は、既に単行論文三本を発表し、四本目を入稿済みである。また全国組織の専門学会「軍記・語り物研究会」で口頭発表を行っている。口頭発表も含め、発表済みの単行論文は、その都度先学の批評を仰いできた。いずれも懇切な意見・肯定的な批評が寄せられている。

本論文は、これまでの蓄積を基礎稿として、整序・改訂を施したものに、研究史を付して、自らの研究の位置を見定めた上で、学位申請論文としたものである。

以上、楊夫高の学位申請論文について、審査を行った。

本論文は、日本の中世文学の代表的な作品を、古典文学研究の基幹をなす研究方法に基づいて行われたものであり、「歴史叙述」の問題は、まさに「文学」の中心課題というべきものである。こうした問題に真正面から取り組んで、具体的に考察し、成果を挙げたことに対し、学位は、「博士(文学)」がふさわしいものと判断した。